

# 活動報告書

報告者氏名： 井上賞子

所属： 松江市立意東小学校

記録日： 29年 2月2日

## 【対象児の情報】

○学年 小学校1年生

○障害名 読み書きの困難、コミュニケーションの苦手さ

○障害と困難の内容

- ・文字と音とのつながりがとりづらく、巧緻性の課題も推察された。そのため、自分の名前を読むことも書くこともできなかった。
- ・思いをうまく伝えることができず、自発的な発信があまり見られなかった。
- ・活動への見通しが持ちづらく、定着への取り組みや集中が継続しにくかった。

## 【活動目的】

○当初のねらい

- ・情報を共有する方法が増えることで、応答する体験や喜びを重ね、周囲への関心が広がる。
- ・発信や確認の手だてになるよう、ひらがなの読み書きを習得する。

○実施期間 平成28年4月から平成29年2月

○実施者 井上賞子

○実施者と対象児の関係

☆特別支援学級担任として

## 【活動内容と対象児の変化】

### ○対象児の事前の状況

#### 【読む】

- ・自分の名前も、判別できない。読める文字は0で入学。

#### 【書く】

- ・自分から鉛筆を持った経験がほぼない。
- ・文字だけでなく、絵を描くこともしなかった。

#### 【話す】

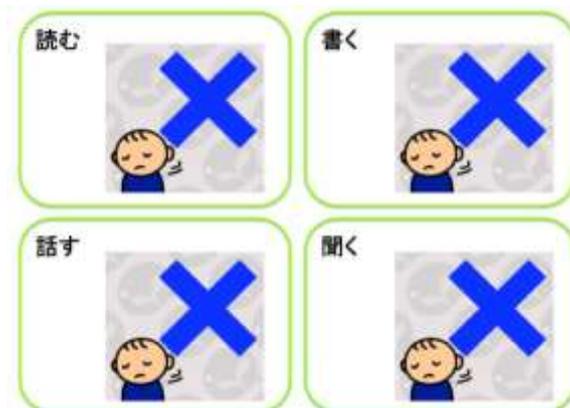
- ・吃音と幼児音があり、早口で不明瞭。
- ・声をかけられても、反応を返さず黙って立ち去ることも多い。
- ・自分から話しかけたり、何かを求めたりすることはあまりない。

#### 【聞く】

・理解言語は多いように思われたが、注意の継続が困難で多動傾向もあり、その場においても聞いていないように見える。

#### 【行動】

- ・周囲へ働きかけたり意志を伝えたりする経験に乏しく、困ったり不安になったりすると無言でその場を離れたり、歩き回ったりする。
- ・保育所時代は加配が付き、一対一で対応していた。
- ・新しい活動や場所に対しては、とても不安な様子を示す。



※就学前の姿からは、軽度の知的な遅れも疑われた。しかし、発信の少なさもあり、本人の願いや思いも、周囲には伝わっていないように見えた。そこで、取り組みやすい方法や確認できる方法を持つことで、「知りたいこと」「伝えたいこと」を広げ、安心できる人や場所を増やしていきたいと考えた。

## ○活動の具体的内容

### 1. 「思いを伝え合う」ツールとして

→ 「ByTalk forShool」を活用



### 2. 「読み」「書き」の習得を支えるツールとして

→①音との一致を促す

「デイジーポット」「FirstWords: Japanese」「ひらがな 五十音」「これなあに？」

「ひらがなよめるかな」「ひらがな こどもゆびどりる」「i 暗記」を活用

→②完成の見通しをもって書く体験につなげる

「1日10分でえがじょうずにかけるアプリ」を活用

→③文字のとらえやすさを支える

「カタカナおけいこ 楽しく学べる日本語教材」

「小1かん字ドリル - 小学校で学ぶ漢字80字!」「ひらがなおけいこ for iPhone」を活用

→④言葉の合成や分解、イメージ化を支える

「にほんごひらがな」「Bitsboard PRO」「視覚支援シンボル「さがすんです。」」を活用

→⑤文章化を支える

簡易日記作成ソフトの開発中のもの を活用

→⑥活動参加の見通しを支える

『ひなぎく』～簡単にマルチメディアデイジーができるんです!～

「カメラ」「ミラーカメラ/ ミラー反転の動画再生(無料版)」を活用



## ○対象児の事後の変化

### 1. 「思いを伝え合う」取り組みについて

思いの共有の方法を広げ、やりとりをた楽しんでたり、伝えることへのモチベーションを高めたりしていきたいと考えて、学校用の安全な SNS である「ByTalk forShool」を導入した。「ByTalk forShool」には、多様なツールが用意されており、活用への負荷を対象児童に合わせて調整しやすいと考えた。



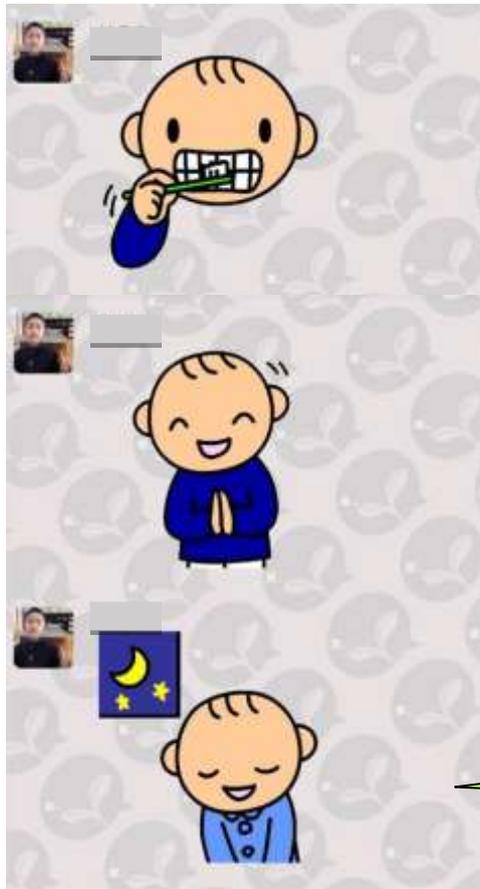
☆活用初期 →スタンプでのやり取り

- ・シンプルでわかりやすいドロップレットプロジェクトのスタンプから、やりとりをスタートした。
- ・「おはよう」「おやすみ」といった、わかりやすい場面でのやりとりから始めた。
- ・すぐに使い方を覚え、楽しんで送ってくるようになった。
- ・教師からの返信を楽しみにしたり、自分でスタンプを組み合わせて送ったりする姿も出てきた。



わかりやすい場面でのやりとり

教師からのテキストは、保護者が読んでくださった。



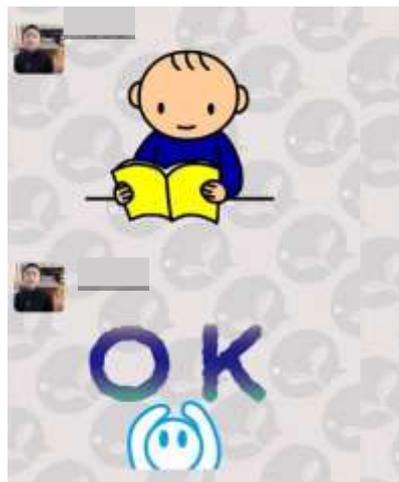
スタンプを組み合わせ、場面や思いを伝えるようになっていった

☆5月なかばから→画像の活用がスタート

- ・教師から何度か画像を送っていたら、「先生に送るから写真を撮ってほしい」と自分から家族に要求するようになっていった。
- ・次第に、スタンプ+写真という表現が増えた。
- ・また、こちらからの問いかけに対して、適したスタンプを選んで返信するようになり、呼応するやりとりが増えてきた。



初めて画像を送ってきた時のもの。お気に入りのぬいぐるみを、見せてくれた。



「大変よくできました」という教師からの反応に、ガッツポーズで応じていた。



☆6月に入ってから→音声の活用がスタート

- ・教師から定型の「おはよう」や「おやすみ」に対して、スタンプ+文字+音声を送ることを始めた。
- ・使い方は最初に見せただけだったが、自分でマイクを見つけ出し、音声もつけてくるようになった。
- ・音声も最初は「おはよう」「おやすみ」からだったが、次第に多様な表現に広がっている。
- ・写真を撮ってもらうとき以外は、ほぼ一人で操作している。



安来の運動公園だよ

夕べ寝るのが遅くなって、朝寝坊してしま  
った～。日曜日が半分終わっちゃったよ～



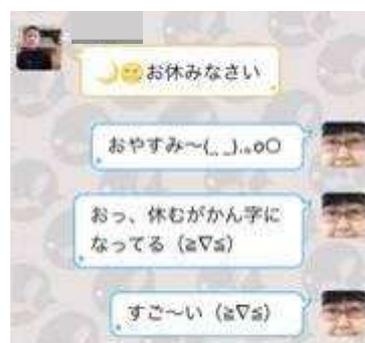
教師のコメントを聞いて、びっ  
くりのスタンプを選んできた



求めに応じたの反応

☆7月に入ってから→テキスト入力がスタート

- ・日常的に学習の中で50音配列のキーボードを使っていること、単音の読み書きがほぼスムーズにできるようになってきたことなどの様子から、テキスト入力も手段になるといいと考え、教師からの発信も、テキストを少しずつ多めにしていた。
- ・Q児からも「おはよ」「ごはんおわつたよ」など、当初は表記の間違もあったが、自分でテキストを打って返信してくるようになった。
- ・現在は、漢字、カタカナもとりまぜながら送ってくるようになっている。



☆「思いを伝え合う」取り組みを振り返って

- ・スタンプを選ぶから始めたことで、抵抗なくスタートできた。
- ・「返事が来る」ことを楽しむ中で「伝えたいこと」が増え、「画像」「音声」「テキスト」と活用が広がっていった。
- ・手軽な手立てを持てたことで、「先生に見せたい」「教えたい」という思いが広がっている。
- ・自分の体験や興味のあるものの情報が共有できてきたことで、会話が格段に増えた。
- ・テキストの活用が進み、日常的に思いを文章化していく体験につながった。

2. 「読み」「書き」を支える取り組みについて

①音との一致を促す

☆読めない時から

「FirstWords: Japanese」



- ・薄く示されるお手本に文字のチップを重ねると、音声化してくれる。
- ・正解すると、「あ・お・あお」というふうに、単音→単語と発音してくれる。
- ・「かんたん」と言いながらマッチングして言葉を作っていた。

絵を触ると、「あ  
お」と聞こえる

文字チップを触ると、単音が聞こえる

マッチングしていく  
と、単音→言葉と発音  
してくれる

※Qさんは、絵を見て語彙が浮かぶ。マッチングも問題なくできるため、すらすらと回答することができた。単音を触った時に音が返ってくることで、語彙として持っている言葉の音と文字との一致の体験を重ねていけることができた。

「これなあに」



・写真を見て、その名前を二択から選ぶ。わからないときは「れんしゅう」ボタンを押して一覧から写真を選ぶと、正解がテキストと音声で示される



うさぎ

※「全く読めない」状態でも取り組めた。すぐに確認の方法を覚えて、確かめながら進んでいった。

※スムーズにヒントの画像を参照して答える姿からは、「課題を見て語彙がわかり、その画像を記憶できる」「一覧表からすぐに対象の画像を選び出せる」「正解を確認し、それを覚えておいて問題に戻って回答できる」という力があることが見て取れた。

※繰り返す中で、単音がまだ読めなくても、「視覚語彙」として選べるものも増えた。

### 「ひらがな こどもゆびどりる」



- いろいろなモードがある中の「おぼえるドリル」を活用。
- 50音表から文字を探してことばを作っていた。
- 絵のヒントがでているので、まだ文字を読めない時から取り組めた。
- 50音表から探すことで、「この音は50音表のこのへん」という見通しにつなげたいと考えた。

→この力は、先で50音表を参照したり、50音キーボードを使ったり、もじり列の意識を持ったりする際にも重要だと考えた。



- 上に示された課題を下の表から1文字ずつ選んでいく。
- 絵のヒントと音のヒント両方がある。
- 促音や濁音、半濁音は別のアクションが必要になるので、意識を持ちやすかった。

※取り組む中で、スムーズに位置を確認できるようになっていった。絵も手がかりにしているが、「このへん」という見通しも持てるようになっていった。

☆読める文字が増え始めてから

### 「ひらがな 五十音」



- 単音を聞いて3択から選んで答える。アナログの2択が少しずつできるようになってから始めた。
- 文字を見て音が浮かばない段階でも、音を聞いて3択から選ぶというのは取り組みやすかったようだ。



※始めてすぐに、選べる字、少し考えて選べる字、いつも間違えてしまう字が、決まってきた、「またこれか」「こっちかこっちなんだけどなー」と、つぶやきながら取り組んでいた。

※ヒントのない課題であったが、想起ができて始めている段階から始めたので「考えて選んで正解する」→「やったー!」、「考えて選んで間違える」→「あー、こっちだった」と悔しがったり確認したりするような様子が見られた。

※繰り返す中で、想起して正解できるものが増えていった。5月の終わりには、3択であればほぼ正解できるようになっていった。



### 「ひらがなよめるかな」

- 画像を見て、その名前が下に出ているが、一文字見えない状態になっていて、示された3択の中から、そこに入っている文字を選んでいく。
  - 「ひらがな50音」は、音を聞いての3択課題だったが、「ひらがなよめるかな」は、画像を見て名前を思い浮かべ、表示されている文字をその語彙で読んでいきながら、隠れている文字を3択から選んでいく。
- ※画像を見て語彙がわかり、それを音に分解することができるようになってきていたので、単語を自分で唱えながら抜けている文字を見つけていくことができた。



※語尾音、語中音など、抜けている箇所が様々なので、言葉の塊を意識しながら探っていくことができた。

### 「i 暗記」



- 単語帳アプリ。
- 表の問題の答えを、裏に書いておき、触って正解を確認することができる。
- 覚えたカードとわからなかったカードを簡単に仕分けして、間違えたものだけ出題させることができるため、負担少なく反復の学習が可能。



- 問題の画面をタップすると、うらの解答が確認できる
- 正解したら上へ
- 間違えたり、わからなかったりしたら下へ
- ワンアクションで簡単に仕分け

• アナログカードでの学習  
• 読めたもの、読めなかったものを教師が判定して仕分けして、反復練習をしていた

• 2回目以降は、間違えたカードだけ表示されるので、苦手なカードだけ集中して練習できる

01	11:27	実行数 10/147
01	11:27	実行数 16/147
01	11:25	実行数 147/147



※漢字の読みの学習で使用した。アナログのカードを使って練習していたときは、大人が付き添って提示したり正誤を判定したりカードを仕分けたりしていたが、このアプリを使うことで、1人で学習をやり終えることができるようになった。

※間違えたカードは正解を見て繰り返して唱えるなど、自分なりの攻略方法を見つけて取り組む姿が見られた。

※わからない漢字であっても、すぐに正解を確認することができるので、安心して取り組めた。

※問題を見て読みを答える繰り返しの中で、漢字から読みへの想起がスムーズになってきている。

## 「デイジーポット」

・背景やハイライトの色や文字の大きさを指定して、



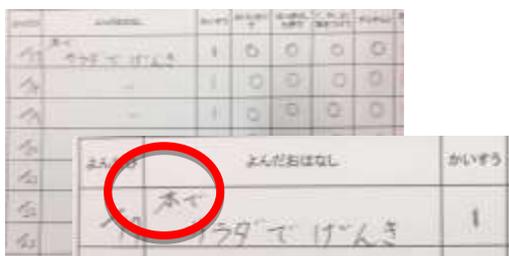
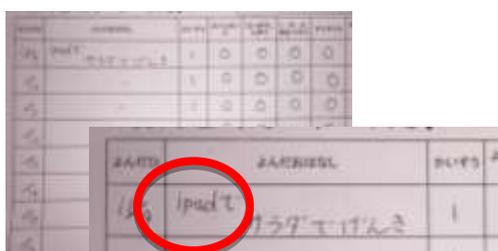
読み上げを聞きながら読んでいくことができる。

- ・背景は紺、ハイライトは黄色の組み合わせを選んだ。
- ・「間」の設定を調整して、追い読みができるようにしている。

「あめ あめ きらい ぶう ぶう ぶう」  
の後、「俺も嫌い」とつぶやいていた。



※一人で読むと、まだ拾い読みの状態の時も、音を聞いてから読むことで、言葉の塊を意識する姿も見られた。  
※毎日の音読も、まずは「デイジーで」一定期間練習したあと、「本で」音読することを組み合わせて行った。  
デイジーでの練習期間に音のイメージや言葉の塊や切れ目の見通しがついていたこともあり、音の情報がない状態でもスムーズに読むことができた。



## ☆音との一致を促す取り組みを振り返って

- ・「聞いて選ぶ」「聞いて確かめる」ことができるのは、ICT を活用する大きなメリットの一つだと改めて感じた。
- ・一学期末の時点で、ひらがなは特殊音節も含めて、ほぼ正確に読めるようになった。
- ・二学期末の時点で、1年生の配当漢字については、読み変えも含めてほぼ読めるようになった。
- ・カタカナの学習は、ひらがなの混乱を避けるため、ひらがなと漢字が定着した三学期になってから本格的に取り組んだ。言葉の意識が高まってきており、ひらがなや漢字の時には見られなかった「わからない文字も文脈から予想して読む」姿が見られた。
- ・ひらがな→漢字→カタカナと読める文字が増えていくにつれて、日常的に目に入る文字を声に出して読む姿が見られるようになった。
- ・「音の支援があれば内容がわかる」から「音の支援がない初見の文章でも、短いものであれば正確に内容を読み取ることができる」ようになってきた。
- ・算数の文章題などは、1人で読んで題意を理解して正しく答えることができるようになってきている。

## ②完成の見通しをもって書く体験につなげる

### ☆書けない時から



「1日10分でえがじょうずにかけるアプリ」

- ・簡単な絵を一行程ずつ動画で確認しながら描いていける。
- ・できあがったお手本ではないため、「どうすればこれが描けるのか」の見通しをもちやすい。

このアプリを使って描いた、車と太陽  
最初は放射状に線が書けなかった太陽の線も、段々かけるようになった



※お手本の描き方を確認しながら、楽しんで描くことができた。

※一行程ずつ確認していくことで、イメージした完成図が描けることに気づけた様子だった。

※「うまくかけた」と達成感を持つことができ、休み時間にもよく描くようになった。

### ③文字のとらえやすさを支える

☆書けない時から



「ひらがなおけいこ for iPhone」

- ひらがなの始点、終点、方向性が一角ごとに示されるため、負担なく、正しくとらえ直すことができる。
- 音と画像でイメージを補いながら練習できる。



※②の活動を通して、一行程ずつ進めていくことについては、見通しが持っていた。

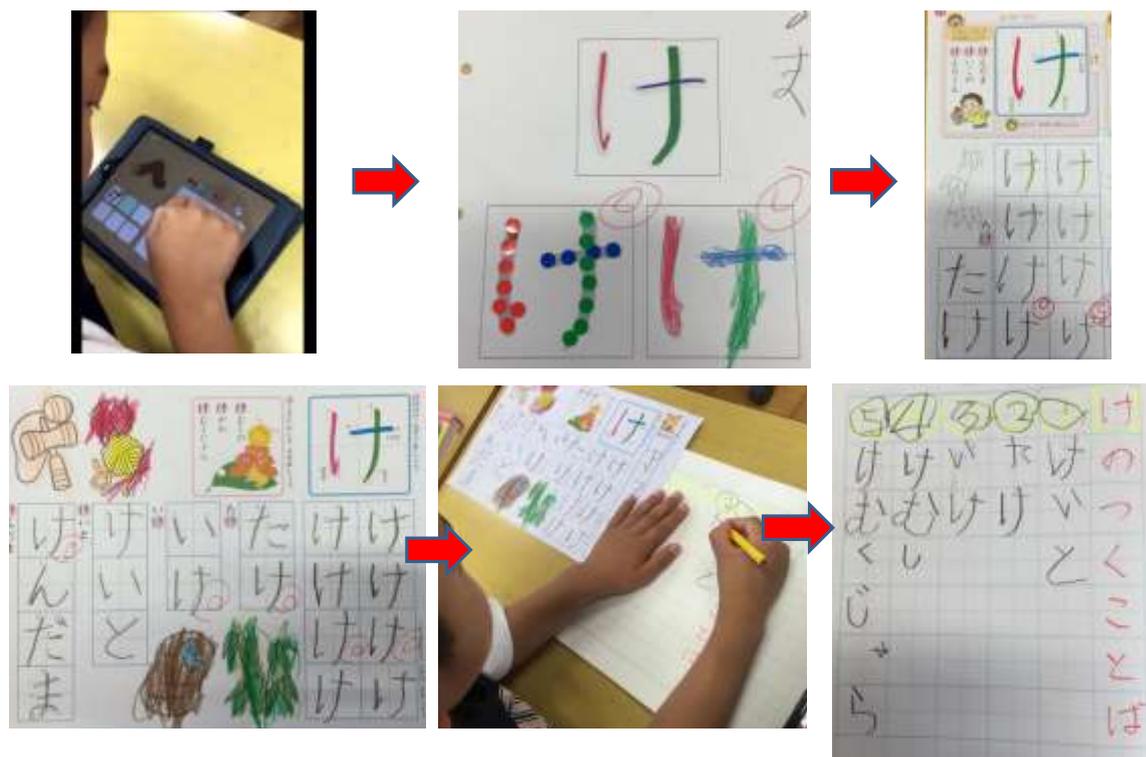
※大きな画面でガイドを手がかりにすることで、正しく書いていく経験につながった。

※書き終えた後、必ず音が示されるので、「今自分が書いた文字」の音を意識しやすかった。

※すらすらと書けるので、進んで取り組む姿が見られた。

※アプリで正しくとらえて書いた後、以下のプロセスで書きの練習に取り組んだ。

- シールを貼ったり、塗り分けたりする活動を通じて、時間をかけてじっくり確認する
- 2種類の書き込みドリルを使って、書字の練習をする
- ドリルの語彙を手がかりに、練習した文字のつく言葉集めをしてノートに書く



※捉え直しをしてから「書く」に取り組んだことで、線の方向性等を正しく意識して書くことができた。  
 ※多様な方法を組み合わせながら一文字について練習していったことで、想起しやすさにもつながっていた。

☆ひらがなが想起して書けるようになった状態から

「小1かん字ドリル - 小学校で学ぶ漢字 80 字！」



- ・ひらがなおけいこと同じ形式で、始点、終点、方向性が一画ごとに示される。
- ・ガイドに沿うことで、正確に練習できる。・読みを音で確認しながら練習できる。
- ・「かんじかくにん」「よみかくにん」のモードを組み合わせることで、練習したことを想起する反復も行える。
- ・各モードで、わからなくなったときは、練習モードにもどって確認してから答えることができるため、定着していない段階でも、1人で最後までやり終えることができる。

よみがなかくにんモード

- ・漢字のよみがなを、一文字ずつ手書きで入力
- ・わからなくなったら「れんしゅうする」をタップ

れんしゅうモードがひらき、正解のよみがなを確認することができる。

※ひらがなで取り組んでいたものと同じ会社のアプリで、ガイドの出方も共通なため、スムーズに取り組むことができた。

※しかし、このアプリの後ノートへ書いて練習しようとする、スタートの「山」という漢字が、何度かいても形をとることができなかった。「む」「ふ」「あ」といった文字もスムーズに書けるようになっていたので、最初はなぜ「山」が書けないのか不思議だったが、「ひらがなになくて漢字にある要素」を考えてみて、「線の終点が他の線と接する」ところで困っているのではないかということが予想された。そのため、漢字でもシールを使っての構成の確認を行った。ひらがなでは、「どの線がどうつながっているかを確認する」ことを主目的にしていたが、漢字では、「どこから書き始めるか」「どこで接するか」「ぴったり(接する)なのか、ズボッ(突き抜ける)なのか」といった点に注意しながら、シールを貼っていった。

※漢字の学習では、アプリでの学習の後、以下のプロセスで学習した。

- ・シールを貼っていき、接している部分や各線の長さ位置などを確認していく
- ・1文字1ページの書き込みドリルで、書字の練習をする
- ・同じ書き込みドリルを宿題にし、家庭学習でも確認する
- ・複数の書き込みドリルを使い、書き込んで練習したり、想起して答えたりすることを繰り返す
- ・書き込みドリルの短文に数字をうっておき、ノートにも数字をうっておいて、番号を確認しながら視写に取り組む



※「耳・手」といったとらえが難しい漢字についても、正確に書くことができるようになっている。

☆ひらがなと漢字が想起して書けるようになった状態から

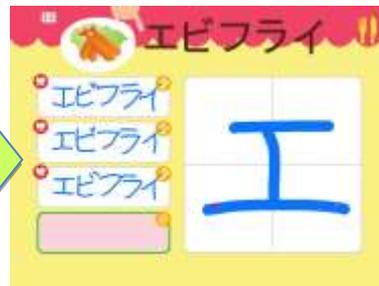
「カタカナおけいこ 楽しく学べる日本語教材」



- ・システムは、ひらがな、漢字と同様。視点、終点、方向性が示され、音と画像で書いている文字について確認しながら学習を進めていくことができる。
- ・一文字ずつの練習モードの他に「たんご」というモードがあり、カタカナことばの練習をすることができる。
- ・「たんご」モードでも、一文字ずつ始点、終点、方向性が示され、確認しながら練習できる。

「たんご」モードの「レストラン」

- ・練習したい単語を選んで、一文字ずつ書いていく

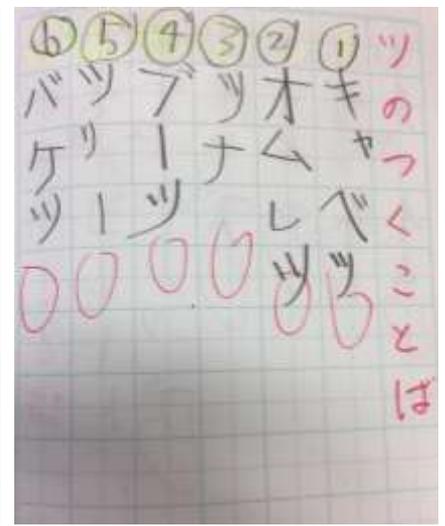
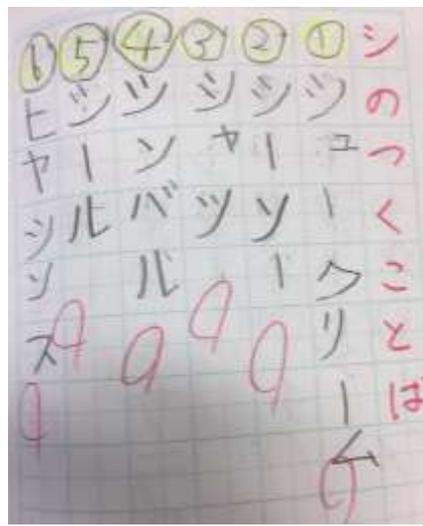
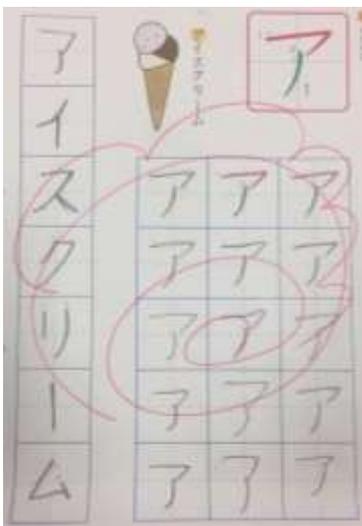


※ひらがなと漢字がスムーズに想起できるようになってから本格的に取り組んだが、日常の中にはカタカナ表記があふれており、文字に関心が出始めていたこともあり、「全く0の状態」だったひらがなや漢字に比べ、かなりの数のカタカナが読める状態だった。書きについても、「ドリル・プリント」といった、毎日の連絡帳で書いていた文字以外にも、「形が浮かぶ」ことで「たぶんこう」と書ける文字もある状態からのスタートだった。

※「シ・ツ」や「ア・マ」といった文字についても、当初心配していたが、正確に書き分けることができた。

※アプリで正しくとらえて書いた後、以下のプロセスで書きの練習に取り組んだ。

- ・書き込みドリルとプリントを使って、書字の練習をする
- ・ドリルやプリントの語彙を手がかりに、練習した文字のつく言葉集めをしてノートに書く



## ☆書くことへの取り組みを振り返って

- ・鉛筆を持った経験がほぼない状態からのスタートだったが、「どう書けばいいのか」という見通しが持てると、書くことを楽しむ姿が見られた。
- ・まだ細かな力の調整などは苦手だが、「ここは長いんでしょ」「こっちは出ないよ」など、お手本を見て構成要素の特徴をとらえたり、線を正しく分解して書いたりすることもできるようになってきている。
- ・同じパターンでの学習の中で、集中の継続が顕著に見られるようになってきた。
- ・「ひらがな」で、一行程ずつ確認しながら文字を完成させていく見通しを持ち、「漢字」で、構成要素の線相互の関係の意識を高めてきたように感じる。
- ・「ひらがな」と「カタカナ」の混同を防ぐため、「カタカナ」は時期を開けると同時に、「カタカナで書く言葉」の練習を中心に進めた。2月現在、カタカナの学習も7割程度進んでいるが、ひらがなと混乱する様子は見られない。「カタカナ言葉集め」では、「おもち・・・は、ひらがなだよね～」というように、「この言葉はどちらの表記になるのか」を考える姿も見られる。

### ④言葉の合成や分解、イメージ化を支える

#### 「にほんごひらがな」

- ・言葉を音で聞いて、順番に文字を選択していく。
  - ・言葉を文字に分解していくというプロセスの学習ができる。
  - ・時間制限はなく、リズムカルに課題となる言葉が繰り返されるので、音の意識を保ちながら考えることができる。
- ※音のヒントを繰り返して呟きながら、文字を選んでいった。

あ



※拗音や長音が出てくると困っていたが、残っている文字を見て、「これは最後でしょ」といいながら探す姿も見られた。

※語頭音や語尾音はとらえやすいが、語中音が抜けてしまったり、何度も復唱しないと捉えられなかったりする姿が見られた。



#### 「Bitsboard PRO」

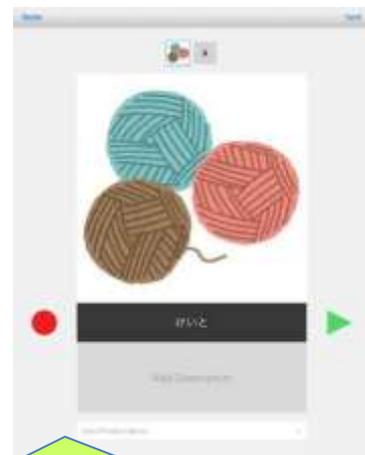
#### 「視覚支援シンボル「さがすんです。」



- ・「Oのつくことば」について、お手本を見ながらノートに書く(③での取り組み)
- ・「さがすんです」で、その言葉に合う画像を探して保存する
- ・BitsBordの「ことば」のボードに画像・音声・テキストを入力していき、「ことばカード」を作る
- ・できたら文字マッチングや言葉の選択課題などに取り組む



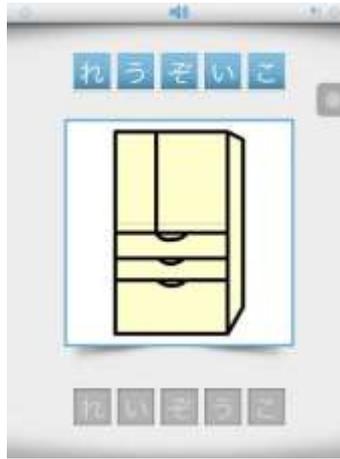
「さがすんです」で出てきた検索画面から、自分のイメージにあうものを選んで、保存



BitsBordで画像と音声とテキストを入力して、ことばカードを作る



作ったカードの出題形式を選ぶことができる。音・テキスト・画像の組み合わせで、選択やマッチングの多様な課題に取り組める。



同じ出題形式の中でも、ヒントのあるなしなど、細かな負荷の設定ができる



※作業の行程で何度も同じ言葉を読んだり打ち込んだりしていくため、文字やことばの想起がスムーズになり、問題に取り組むと、正解をすぐに選ぶことができた。

※50音キーボードの操作に慣れ、スムーズに探している文字を持つことができるようになった。

※言葉を復唱しながら入力していくことで、文字から言葉への合成の体験を重ねることができた。

※自分で音声の入力までしていくので、文字と音の一致も促された。

※録音したものを自分で聞いて「失敗」といって取り直したりする姿が見られた。不明瞭な発音の部分について、綺麗に発音しようという意識で話す姿につながった。

※1学期の間に、(46文字+拗音3文字+促音1文字)×5つ+濁音の入った言葉5つ+半濁音の入った言葉5つ=260枚のカードを自作して、自信をつけた。

※出題方法や負荷を変えた課題に取り組むことで、読み、言葉の合成、などの定着が進んだ。

※3学期に入り、カタカナでも同様のカードづくりとカードを使っての学習に取り組んでいる。50音キーボードの操作に慣れているので、よりスムーズに取り組めている。



### ☆言葉の合成や分解、イメージ化への取り組みを振り返って

言葉あつめ→画像検索→ボード入力→音・テキスト・画像を組み合わせた問題に取り組むという一連の流れの中で、同じ言葉を繰り返しつつやき、書いたり入力したり選んだりしていくことで、

- ・50音表の中からの選択
- ・文字の想起
- ・文字から言葉への組み立て

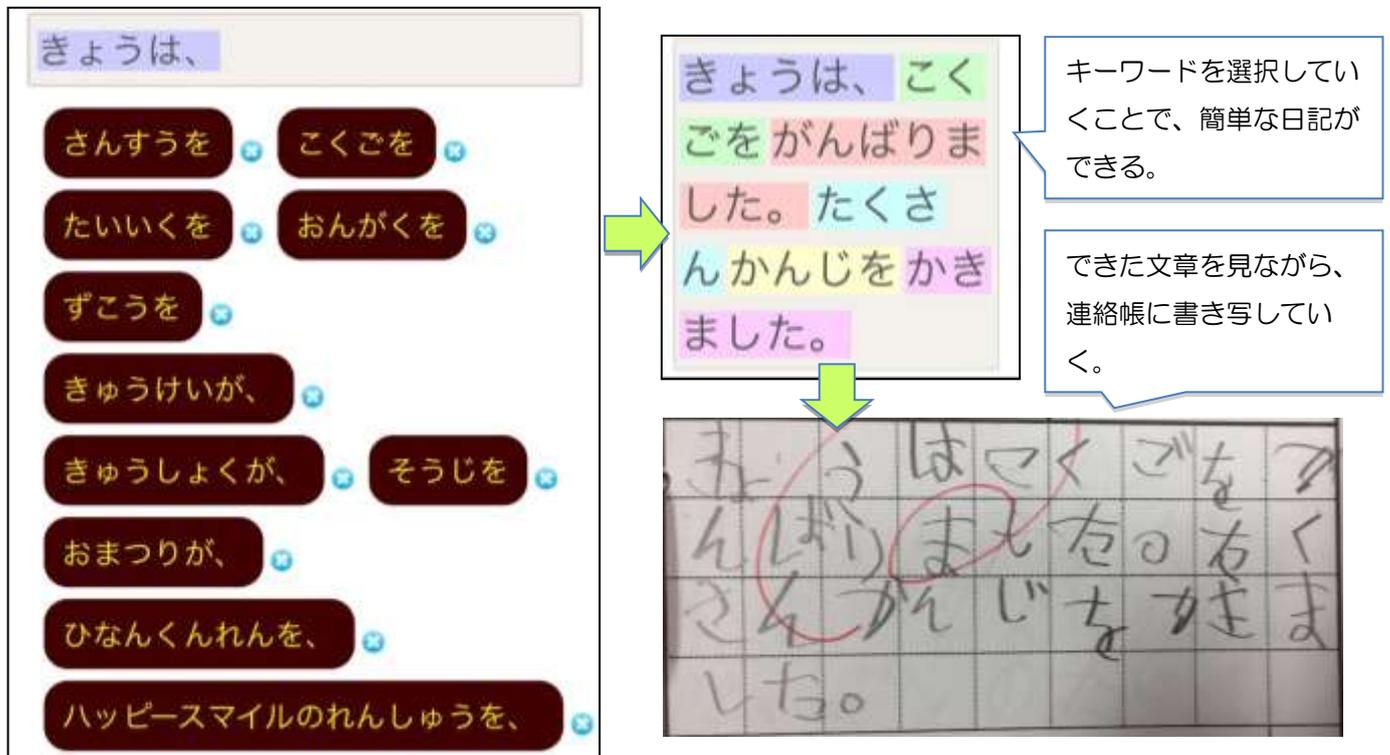
がスムーズになってきている。

そして何より、自分のイメージにあった画像を探したり、自分の声を録音したりすることを楽しんで学習することができた。

### ⑤文章化を支える

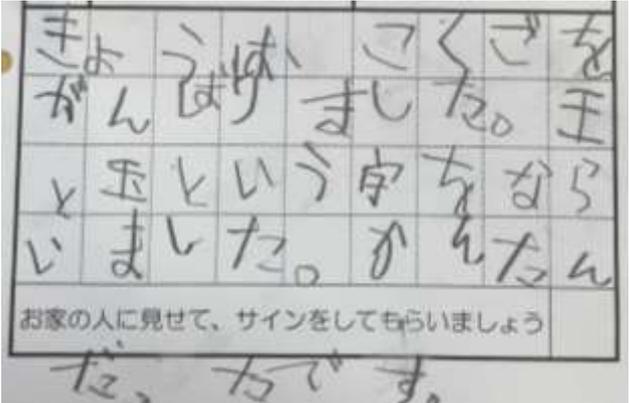
#### 開発中の簡易日記作成ソフト

- ・キーワードの中から選んでいくことで、簡単な日記の文章ができる。
- ・選択肢は、自由に追加することができるので、「この中がない」という時に随時追加していくことで、色々な組み合わせの文章になる。
- ・文字の大きさは、三段階で切り替えられる。
- ・選択した言葉の塊ごとに背景色を変えて表示することで、視写する際にとらえやすくできる。



キーワードは、自由に追加できる。一つ選ぶと、その続きのキーワードの選択肢が表示される。

- ※毎日の連絡帳に「今日頑張ったこと」を書く際に、取り組んだ。
- ※2学期の始めは、「何を頑張った？」と聞くと、「体育」や「国語」と答えることができて、「じゃあそれを書いてみよう」と言われると、どう書けばいいのかわからず、教師がガイドしたり、聞き取ってお手本を書いてからそれを見て映したりしていた。このソフトを使うようになって、項目の追加については援助をしたが、自分で選択して文章を作り、それを見ながら書き終えるところまで、1人でスムーズに行えるようになった。
- ※最初のころは同じような文章ばかりだったが、次第に「今日はハッピースマイルのことが書きたい」とか「避難訓練がいい」というふうに、項目の追加をリクエストしてくるようになり、意欲も高まった。
- ※不注意が高く、視写はどこを書いているのかわからなくなってしまう姿も見られたが、塊ごとに色分けされていることが手掛かりとなり、正しく書き写せた。
- ※こうしたパターンで毎日文章を書いていたら、次第にソフトで確認しなくても、想起して一人で書けるようになっていった。右は、11月18日の日記だが、ソフトを使わず、お手本がない状態で、助詞や促音、句読点についても、正しく書くことができています。
- ※現在は、書きたいことを声に出しながら書いている。



⑥活動参加の見通しを支える

『ひなぎく』～簡単にマルチメディアデージーができるんです！～



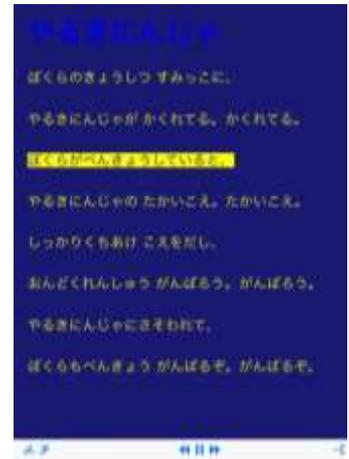
- ・簡単にオリジナルのマルチメディアデージーbookを作ることができる。
- ・再生はデージー教科書同様に背景やハイライトの色、フォントの大きさなどを調整することができる。
- ・「間」の設定をすることで、追い読みでの音読もできる。

※学習発表会での群読のセリフを打ち込み、音声をつけてマルチメディアデージーのデータを作成し、それを使って練習に取り組んだ。

※プリントでは、どこを見ているのか、わからなくなってしまっていたのが、ガイドが出ることで、注目すべき場所がわかり、音声が付くことで、リズムに合わせたセリフの言い回しも、スムーズに覚えることができた。

※1人で練習ができるため、機会が増えて正確に覚えることができた。

※当日は、堂々と舞台上で大きな声ですべての群読のセリフを言うことができ、自信をつけた。



「カメラ」「ミラーカメラ/ ミラー反転の動画再生(無料版)」

・カメラでとった動画をミラーカメラに読み込むことで、左右を反転させて再生させることができる。

※学習発表会での「虫の太極拳」のふりつけを、友達のビデオを反転再生させて練習した。

※反転させているので、向かい合った状態でも、見たまま練習できたので、左右の動きを間違えずに覚えることができた。

※ビデオには曲もついているため、音楽に合わせた動きを練習することができた。

※群読のセリフ同様、1人で練習をすることが可能なため、取り組む機会が増えて、正確にふりを覚えることができた。

※苦手な「ゆっくりの動き」や「動きを途中で止める」動作も、ビデオの友達の姿に合わせて取り組むことで、意識的に動きを調節する姿が見られた。



左→友達が踊っている動画  
右→ミラーカメラで反転させた動画



揚げる足もきちんとそろって、片足立ちで動きを止める振り付けも、しっかりできた。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ○報告者の主観的気づき

#### ☆伝わる見通しと方法の広がり、関わりへの意欲を広げたのではないかな

##### ・「思いを伝え合う」取り組みでのエピソードから

休日に広島に出かけ、たくさんの画像や音声、スタンプを送ってきた。

次の日、朝一番に「おはよう」という前に「あげもみじ、おいしいよね」と話しかけてきた。前日のやり取りの中で、

- ・Qさんが食べたあげもみじがおいしかったこと
- ・先生も食べたことがあって、おいしかったことが共有されていたので、そこから「あげもみじトーク」が始まり、画像検索も交えて話題が広がった。

帰り際に、

「意東川探検のお便りを入れたよ。急だったから連絡帳に書いてないけど、大事だからお家の人にちゃんと見せてね」

とランドセルに追加のお便りを入れていたら、

「忘れるといけんから、声にしといて」と言い出した。

最初、なんのことかわからなかったが、

「あっ、バイトークに送っということ？」と聞くと「そう!」とにっこり。

「わかったよ」と答えると、「いいね」のポーズをして帰っていった。

入れたメッセージはきちんと保護者に共有され、情報は正しく伝わった。



・「しろがね、くると黒くなるよ」「しろって?」「うちのねこ」「しろがくると黒くなるって、しろは汚れてるの?」「しろはよごれてるわけないよ」「???」というような会話になった際も、バイトークでしろの写真が送られてきたことで、「しろという名前の黒猫だ」ということがわかって、Qさんが言いたかったことが伝わる場面があった。

・「話す」だけではうまく伝わらない経験を、これまでたくさんしてきたと思われるが、画像やスタンプで自分の言いたいことの情報に補うことができるため、「伝えたいことが伝わる」状況が生まれている。

・前提の情報を誤解なく共有できること、多様な方法の中で必要だと思うものを無理なく選べることで、Qさんからの発信はとて増えてきている。

・お便りのエピソードからは、Qさんがバイトークの情報を、「確認の手立て」として活用していることも伺えた。これは教師から提案したものでなく、彼自信が見つけた方法であり、その後も「バイトークに送っておく」という手立てを、日常的に活用することができている。

☆無理のない方法から段階を踏んで進めていくことで、見通しを持ちながら学習していったのではないか

### 音との一致を促しての「読み」のステップ

文字が読めない段階から、絵や音を手がかりに「選ぶ」

ヒント表示ありで、単音のマッチング

ヒントで確認して、単語選択

ヒント表示ありで、50音表からの選択

読める文字が増えてきた段階から、手がかりを減らして「想起」

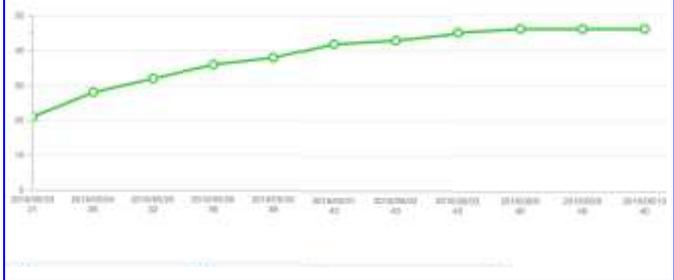
ヒントなしで、3択から単音を選ぶ

単語の中の1文字を、3択から選ぶ

音とガイドで確認しながら、文章を読む

### 単音の読めた数

・三択が8割程度正解できるようになってから開始



- ・段階を踏んで、「読めない」時でもできることから取り組んだことで、無理なく学習の継続ができた。
- ・4月当初、全く読めなかった「この字は何で読む?」というカードを示しての課題に対しても、三択課題が8割程度読めるようになってから取り組んだことで、「えーと」「たしか・・・」「なんだっけ」と記憶を探ったり、「わかった!!」「そうだった!!」と思い出してより強く意識付けていったりする姿が見られた。3択では選べても、単音を想起してだと最初は半分も正解できなかったが、「選べる」状態ができてからの想起の練習であったため、比較的早く正解率が上がっていった。
- ・1学期末に行った読み確認のテストでは、46文字全てをすらすらと想起して読むことができた。
- ・2月現在は、i暗記に入れている147枚の漢字カードも、すらすらと読むことができる。

### 完成の見通しをもつての「書き」へのステップ

文字が書けない段階から、ガイドを手がかりに「完成させる」

手順に分けたガイドを手がかりに、形を描く

手順に分けたガイドを手がかりに、文字を書く

シールや塗り絵で構成を確認してから、なぞって文字を書く

書ける文字が増えてきた段階から、確認して書く「機会を増やす」

お手本を確認しながら、文字を書く

よく使うことばを、確認の手立てをもって練習する

書きたい言葉を、想起したり50音表から探したりして書く



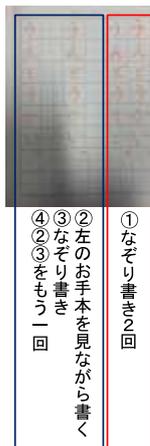
↑入学前の作品。□書き初めということで、他の子は全員文字を書いていた。□

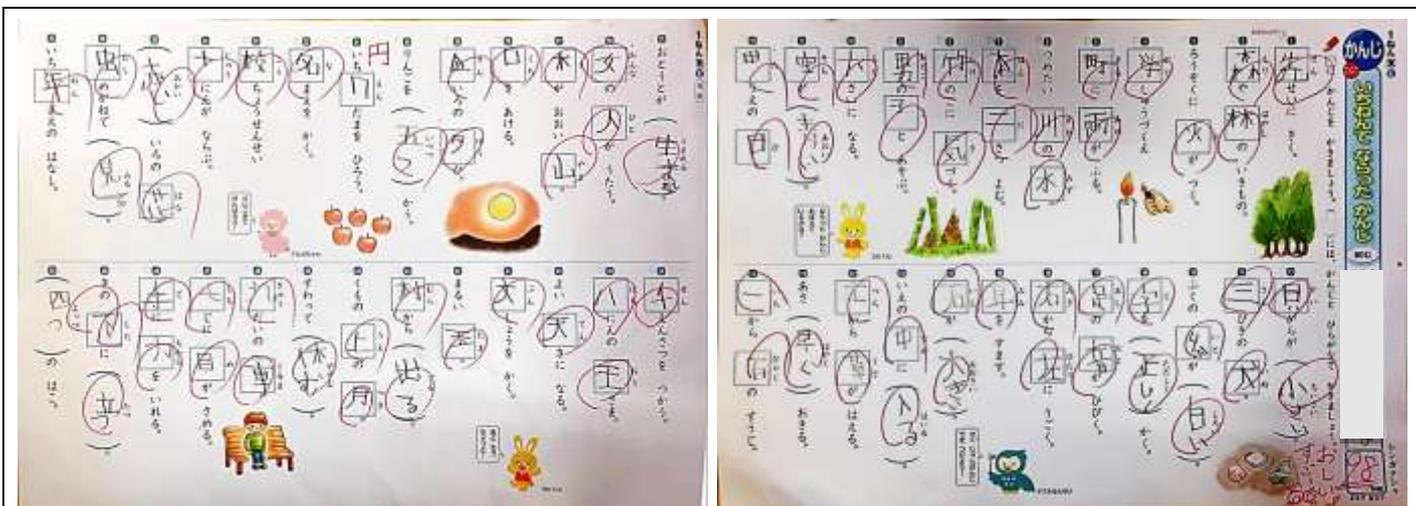


最初の頃のなぞり書き□

- ・決まったパターンで、確認の方法を持ちながらの繰り返しについては、驚くほどスムーズに取り組み、1人でスムーズに進めることができるようになり、練習の機会を確保することにつながった。1ページを同じパターンで練習すると、自分で「うんどうかい」と読み返すなど、「今書いた言葉」について意識する様子も見られた。
- ・1学期末には、46文字全てをスムーズに想起して正しく書けるようになり、2月現在で、1年生の配当漢字80字についても、想起して正確に書くことができる。

### よく使う言葉を同じパターンで練習





※上は、2/2に実施した、「いちねんでならったかんじ」のまとめテストである。裏表で50題80文字が出題されている。「円」という字以外は、全て正解した。「円」についても解答を知らせると、「そうだった。これだった」と悔しがる様子が見られた。

### 言葉の合成や分解、イメージ化へのステップ

読み・書きできる文字が増えてきた段階から、文字をことばに合成したり、ことばを文字に分解したりしながら、ことばと文字がスムーズにつながるようになっていく

単語を聞いて、ばらばらになっている単音を順番に選択

50音キーボードを使って入力し、自分のイメージに合う画像を選ぶ

ことばカードを作る

- ・ 画像を選択
- ・ テキストを入力
- ・ 音声を録音

自作のカードを使って、学習する

- ・ 単音を順番に選択
- ・ 選択肢の中から単語を選択
- ・ 入力して解答

書きたい言葉を、想起したり50音表から探したりして書く

	月	日	木	曜日	明日の予定
朝					かたかな
1	まご				ワッフル
2	さんすう				きんぐ
3	たいく				はっぴーなわとん
4	こくご				
5	一口入				
6					
	き	う	は	か	い
	く	さ	が	ん	は
	り	ま	し	た	
	ち	や	ち	と	い
	が	丸	が	い	と
	べ	ま	し	た	よ
	か	た			
	お家の人に残して、サインをもらいましょう				
					です。

- ・ イメージを持ちながら言葉を文字へ分解したり、文字から言葉を合成していくステップを繰り返していったことで、1学期末には、清音であれば問題なく単語を読んだり書いたりすることができるようになった。
- ・ 画像を検索していく過程で、同じ言葉にも複数のイメージがあることを感じ、「違う見た目でも同じ言葉で示される」という経験を重ねることができた。「あれも毛糸、これも毛糸」というような発言も聞かれている。
- ・ 50音キーボードを使っての入力に慣れてきたことで、文字を忘れてしまうことがあっても、50音表を使って探して書くことができるようになった。また、バイトークにテキストメッセージを送るなど、「伝えたいこと」についてキーボードを使ってテキストにすることもできるようになり、表現の幅も広がってきている。
- ・ 言葉の合成と分解がスムーズになってきており、書きたい言葉や文章を、声に出しながら正確に書くことができるようになってきている。

☆確認の方法をもてたことが、集団の中での活動への見通しにつながったのではないか

- ・ 保育所時代は、集団での活動がとても難しく、発表会のような場面では、「その場にはいたが、一緒に動いたりセリフをいったりすることはなかった」と聞いていた。
- ・ 今年度の学習発表会についても、一斉の指示を受けての練習の段階では、自分が何をすればいいのかわからない見通しがもてず、全く参加できなかった。音声やテキスト、映像といった確認の方法をもてたことで、安心して取

り組むことができ、できるようになっていったことで、みんなと一緒に動いたり群読したりすることを楽しめるようになっていった。

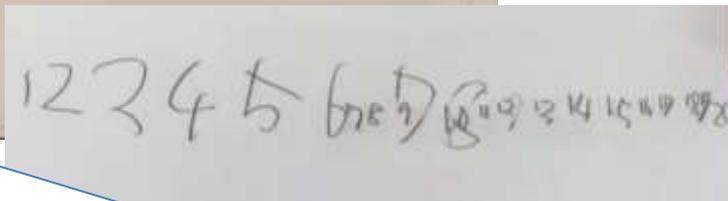
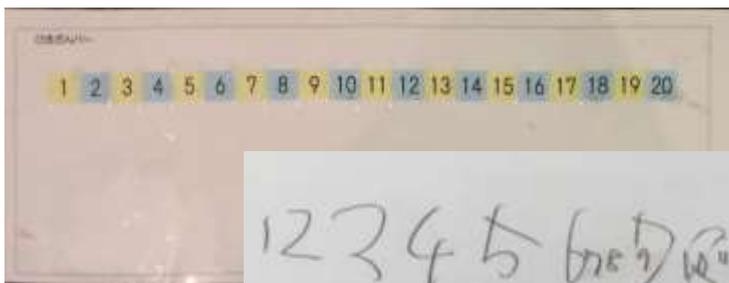
・発表会当日、笑顔で一年生のみんなと演技して大きな声で歌ったり動いたりする姿を見て、たくさんの人にほめてもらい、自信もつけている。

・学習においても、「確認の方法を持つ」ことで、「自分で解決できる」という見通しがもてるようになってきており、やっていたわからなくなったり忘れていたりした時は、自分で確認する方法を探して解決しようとする姿が、日常的に見られる。



「大きなかぶ」の絵を描いた時、「犬のかきかたがわからん」と言って、自分でiPadを開いて、犬の描き方のガイドを見ながら描いていた。猫も同様に描き、ねずみだけはアプリにお手本がなかったため、「先生、ねずみやって」と求めてきた。そこで、教師がアプリと同じ手順でパーツの描き方を示し、それを確認しながら仕上げた。

連絡帳に「プリント」とカタカナで書きたかったが思い出せなかった時、「そうだ、あれがあった」と、前日の連絡帳を自分で持ってきて確認して書いていた。



計算の学習の際、数のバーを手元にもって確認の方法として使っていた。暗算もかなりできるが、繰り上がりや繰り下がりになると、バーで確認して解答することが多かった。

バーを忘れて帰った日の算数プリントの裏に、自分で数を書いて解決の方法として使っていた様子が残っていた。保護者の方からも、「自分でさっと数字を書いて、計算をしていました」という話が聞かれた。



テストの時、時折顔を挙げて時計を見ながら数を数えていた。時計の数字を数のバー代わりにして、確認していた。

※自分で数字を書くことや時計の数字を使うといった方法は、教えていない。自分で解決の方法を探して思いついたようだった。

## □今後への見通し

・「思いを伝える」「文字の習得」共に顕著な成長が見られ、個別の場であれば日常の意思疎通や学習に大きな困難は見られなくなっている。

・一方で、集団の場では、話しかけられても無言になったり、反応しなかったりという姿も時折あり、まだスムーズな意思疎通が難しい様子も見られる。見通しと安心感もてるように、「わかりやすい方法で練習する」という手立てを今年度はとったが、日常的にやり取りできる相手や場が広がっていくことを目指して、発信のフレームを作ったり、場の設定を行ったりしていきたい。

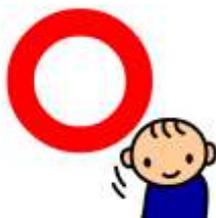
・「確認の方法」があることで学習機会が増え、「自分のやり方」として取り込んでいく力も見られたので、「調べる」「聞く」「参照する」ための手立てを多様を持つことができるよう、意図的な機会を作っていく。

・考えを文章化することが日常的に負荷なくできることを目指して、バイトークの活用も継続する。

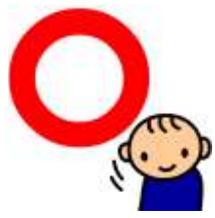
・鉛筆を持ったこともなかった一年前に比べれば、ずいぶんと細かなものも書けるようになってきたが、巧緻性の課題は大きいため、動きを調整していく取り組みを行うのと並行して、キーボードの活用に向けた取り組みも行っていく。

※2月現在

読む

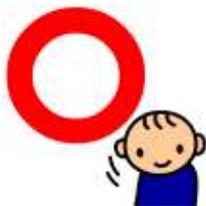


書く



特定の相手と

話す



個別の場で

聞く

